巻 頭 言

社会や医療に開かれた日本補綴歯科学会に向けて

Toward a new era of Japan Prosthodontic Society opening to society and medicine

岡山大学学術研究院医歯薬学域
インプラント再生補綴学分野　窪木拓男

覚えておられる先生方も多いと思うが，医療概念が大きく変遷し，Doctor-Oriented System (DOS) から，Patient-Oriented System (POS) に大きく変わった時期があった．すなわち，歯科医師が得意で，良いと信じる医療を患者に施すという歯科医療のあり方から，おのおのの治療オプションにおける患者のメリット・デメリットを情報共有して，患者と歯科医師が共同で臨床決断 Shared Decision Making を行うべきとの考え方へ変遷したのである[1,2]．医師や歯科医師は，治療により患者が個人として受ける影響（利益，害）を患者の立場に立って情報提供し，複数の治療オプションを比較しながら患者の嗜好に合致した治療法を協働で選択するというパラダイムへ転換した．ここで説明しておかなくてはならないのは，歯科医療の特質である．我々は，口腔という非常に感受性の高い器官を対象にしており，その口腔機能の影響は，毎度の食物摂取により，食後の薬の内服のように患者の体に知らず知らずのうちに重大な影響を与えることになる．この口腔から中枢神経系への感覚入力や固有感覚刺激，咀嚼により取り込まれる栄養，知人との会話や食事における匂いや味を楽しむことによる刺激が大いに影響することはよく知られるようになった．このような効果は，ノーベル経済学賞を受賞したセイラー教授が提唱したナッジ（nudge）理論として知られている．この「知らず知らずのうちに」という点が特筆すべき点であり，補綴歯科治療により適切に維持された口腔機能が，栄養指導などとともに，認知機能の維持や生命予後，さらには自立の喪失に影響を与えうるという点は，我々の仕事の重大さを指し示している[3-5]．

このように，歯科医療の一番のステークフォルダーは，それを受ける患者であることは明白である．では，学会はどうだろうか．学会の重要なステークフォルダーは，会費を支払っている会員や協賛企業などである．馬場前理事長ほかの多大なるご努力により，広告可能な専門医制度が認可された．この専門医制度の威力はあまりに大きい．なぜならば，口腔外科，歯科放射線，小児歯科等とは異なり，一般歯科の中心を担う補綴歯科学会の会員になり頑張っている人に専門医というステータスを与えるのである．この資格は，日本歯科専門医機構が認めるというだけでなく，厚生労働省が認めるのであるから，ある意味，一定の基準で頑張った歯科医を国民に向かって明示することになる．一般歯科においては，すでに歯周病専門医が認可されているが，口腔インプラント，矯正歯科，保存歯科，総合歯科などの専門医がどんどん認可されることになるだろう．では，これらの学会と比較して，日本補綴歯科学会に所属したほうが，より大きなメリットがあると評価されているだろうか．残念ながら，日本歯周病学会の会員数が 1 万人を越えており，我々日本補綴歯科学会の会員数が 6,000 人台であることを考えてみると，まだまだ改善の余地があると言わざるを得ない．すなわち，同様の年会費を要求する他学会と比較して，日本補綴歯科学会のステークフォルダーである会員や協賛企業が得られるメリットを最大化しなくてはならないことは明白である．

先日，二川大会長のもと，2023 年 3 月に鎌倉で Prosthodontic Meeting for Next Generation が開催された．この会では，若手研究者や若手教員を対象に，「今後の日本補綴歯科学会のありかたについて」というワールドカフェ（少人数ディスカッション）を開催した．我々は，あえて若者たちに「日本補綴歯科学会はどうしたらもっと良くなるのか？」という問いを投げかけた．彼らは，臆することなく，臨床実技教育をもっと充実してほ

岡山大学学術研究院医歯薬学域インプラント再生補綴学分野
Department of Oral Rehabilitation and Regenerative Medicine, Okayama University Faculty of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences

しいと述べた．現在の臨床の到達地点をまだ十分知らない若者にとっては，まずはこの到達地点に触れることが先決であり，それでも解けない問題を研究で解決したいという情熱があった．そう言えば我々の学会の先達は，我々が若かりし頃これを満たしてくれていたのかもしれない．その意味で，他の学会では得ることのできない技術教育のネタがあるのであれば，それを積極的に教育に活かさなくてはならない．馬場前理事長の英断で，日本臨床歯科学会（SJCD）との協力体制が進んでいる．補綴というディシプリンを中心にして，学際的・統合的な臨床を進めるというSJCDのビジョンは現在の若者のニーズにマッチしている部分もある．口腔インプラントや歯列矯正，ペリオドンタルプラスティックサージェリー，デジタル歯科を補綴に統合した姿は今後の欠損の減少と相まって時代のニーズを捉えている．一方で，患者のライフステージが進むと，ニーズは明らかに変化し，我々が患者にとってよかれと思って治療した結果が患者に悪影響を与えないように口腔内を整理整頓するという「臨床姿勢の切り返し」が必要になる．若年から後期高齢者の在宅介護まですべてのライフステージを包含した社会全体のニーズを捉える姿勢が補綴学会のあるべき姿であり，SJCDという先鋭技術集団のお陰で補綴学会の視野の広さが改めて浮き彫りになったと感じる．

また，補綴という概念がどのような具体的な内容を示しているのかがわからないままに，大学で残った分野が補綴関連の教室であったために学会に入ったとの意見もあった．先達の時代には，補綴という領域は，咬合をその中心に据えて発展してきた．本論説の前半でも述べたとおり，現在の補綴は，患者の咀嚼機能のみならず，QOL，認知機能，栄養，生命予後までも扱う，口腔機能を中心にした学際的臨床・研究領域となった．超高齢社会に突入した現在，咀嚼機能を診断するためには，咀嚼機能の低下を示す多くの鑑別疾患を知らなくてはならない．この疾患群には，中枢神経疾患や精神心理学的な疾患が含まれ，これまでの口腔顔面痛・口腔運動器疾患で培った知識が役立つことは間違いない．また，補綴治療に加えて，栄養指導を行うためには，少なくとも，責任職種である栄養士と同等の知識がなければならないはずである．このためには，他学会との協働は避けて通れないだろう．このように，口腔機能を科学するうえでやらないといけないことがまだあるのではないか．このような口腔機能や栄養摂取の専門家というビジョンを若者や，歯科衛生士，歯科技工士とともに共有すれば，自ずと補綴とは何か，補綴のアイデンティティが何かが伝わるはずで，多くの会員が賛同してくれるはずである．そのような観点からみると，我々は補綴学という崇高なビジョンを構築するうえでまだ5合目あたりを登っていると言えるのかもしれない．

これらの目標を達成するための具体策にも少し言及しておかなくてはならないだろう．我々は，狭義の補綴という概念から，社会や医療に開かれた補綴に脱皮する必要があるだろう．エビデンスに基づく臨床診断と治療体系の構築のためには，デジタル技術を利用したデータベースが不可欠である．咀嚼機能障害という病名を我々が得るためには，同様の症状や兆候を示す疾患を含んだ鑑別診断樹の策定が避けて通れない．補綴歯科医療の持続可能性（Sustainable Development Goals: SDGs）を追求したより新しい生体材料やエネルギーや資源消費の低減も目標としなくてはならないだろう．また，想像を絶する進化を経て最も効率的なシステムとなった我々の生体やパラサイトをモデルとすることも重要であるから，生物学への注力は欠かせない．その意味で，全身健康や生きる喜びを目指したProsthodontic Medicine[6]の方向性は，それ相応の努力が必要ではあるが，我々の未来を明るく灯しており，その先に本会の繁栄がみえると言ってもよいのではないか．

文　献

1）山下　敦．21世紀の歯科医学を拓く臨床・研究・教育を求めて．東京：医歯薬出版；1999，1-163.
2）石上　元，上田一彦，魚島勝美ほか編著．冠橋義歯補綴学テキスト．第5版．京都：永末書店；2023，8-10.
3）Maekawa K, Ikeuchi T, Shinkai S, Hirano H, Ryu M, Tamaki K et al. Number of functional teeth more strongly predicts all-cause mortality than number of present teeth in Japanese older adults. Geriatr Gerontol Int 2020; 20: 607-14.
4）Maekawa K, Ikeuchi T, Shinkai S, Hirano H, Ryu M, Tamaki K et al. Impact of number of functional teeth on independence of Japanese older adults. Geriatr Gerontol Int 2022; 22: 1032-9.
5）窪木拓男，前川賢治．補綴歯科治療は生命予後の延伸に貢献できるか？ 日補綴会誌 2021；13：117-25.
6）Koyano K. Toward a new era in prosthodontic medicine. J Prosthodont Res 2021; 56: 1-2.